

追悼 藤枝征司先生

## 藤枝征司教授を悼む

学園長 佐伯 弘治

「死生命あり」という古くからの諺がある。「論語」にある子夏の用いた言葉で、人の生死は天命によるもので、人力では如何ともしがたいという意味である。

藤枝征司さんの御他界を思うとき、私には、死生命ありとしか言いようがない。

藤枝さんは私より一回り以上も若く、私からみると、大学人としてはまだまだこれからの人だった。

1965年、流通経済大学の創設に参画して以来、一学部一学科入学定員200名の、海の物とも山の物ともつかない大学を、時には学生たちの熱い情にほだされ、時には同僚に背中を押されながら、とにかく大学運営の中樞を担ってきた私であったが、20年、25年と歳月が経ち、大学が大きくなるにつれて、次は誰にバトンをの思いが、しきりに脳裡をよぎるようになってきた。

もちろん大学では企業のように、上意下達でトップを決めるわけにはいかない。殊に私学の場合は、下手をすると大学が根底から揺らぎかねない。今の日本では、不沈艦のような伝統大学はともかく、多くの中小私学は綱渡りのような経営を余儀なくされているのである。どこの大学でも、学識に長けた人材は少なくないが、この難しい時勢に教学と経営のバランスを持しながら、毅然たる指導力を発揮できる人物を得るのは容易なことではない。だとするならば、昔からいう「衆力功あり」、つまり集団指導体制というやり方もありうるのかな、などと勝手に思いをめぐらしてきた。まさに老婆心である。もっとも集団指導といえどもやっぱりそれに係わる者の人柄であり、能力である。実は、そんなとき、私の脳裡に浮かぶ有力な人材のひとりにもいつも藤枝さんがいた。正義感が強く、情義に篤く、世話好きであり、何ごとにも積極的であった。そんな人柄に対する信頼が社会学部長や教員代表の法人理事というポストにつながったのであろう。

藤枝さんはそれらの要職をよくこなされ、学園の方針を議する会議では、いつも太くボリュームのある声で堂々と意見を開陳された。同時に他の人の意見にもよく耳を傾けられ、決して自説に固執されるようなことはなかった。

僭越ながら、私はそんな藤枝さんの人柄や見識を高く買い、これから先の流通経済大学には欠くべからざる人物だとみていた。わが学園としては、まさに掛け替えのない人物を失ったということである。

ところで、情義に篤いなどという頑固一徹な保守主義者のように聞こえるが、実は彼は正真正銘の革新派で、明治大学政経学部の頃には田口富久治ゼミだったそうである。当時の田口教授は政治学界における若手のホープで先鋭な論客として知られていた。そんなことから私はよく藤枝さんをつかまえて、「あなたは代々木も一目を置く筋金入りの коммуニストだからね」などとひやかしたものである。たしかに彼の正義感、義侠心は、政治学者としての思想的、理論的な背骨に支えられたものであったことは間違いないが、同時にそれは出生地である水戸人の気質、いわゆる水戸っぼそのものだったようでもある。

もう一つ、藤枝さんを思うとき、見逃せないのは教育者としての顔である。本質は至って謹直な教師であったが、反面、学生たちにとってはやさしく思いやりのある先生だったらしい。体育会系の学生たちに言わせると、「怖い親父といった感じでしたが、話のわかるいい先生でした」とのことである。

藤枝さん自身もサッカー部長を務められ、流経大の試合はどこまでも応援に出向いておられた。私も西ヶ丘には何度か御一緒したが、藤枝さんの場合はただの観戦ではなく選手と共に戦っているといった趣があった。また試合場にたまにしか足を運べない私のために、その日の結果をいつもいっぺんに拙宅に知らせてくださってもいた。

幸い今年、藤枝さんの愛情をいっぺんに受けて育った大学のサッカー部が全国大会に駒を進め、付属柏高校のサッカー部も初めて全国の檜舞台に立つことになった。藤枝さんに彼らの晴姿を見ていただけないのは何よりも残念であるが、私には、泉下の藤枝さんの熱のこもった激励の声が、もう今から耳に届いている。(2005年11月30日)